

## 実践報告

# 大学生が地域社会を変革する「地方創生モデル」の開発 —地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の事例を用いて—

見館 好隆<sup>1</sup>・廣川 祐司<sup>2</sup>・村江 史年<sup>3</sup>・内田 晃<sup>4</sup><sup>1</sup>北九州市立大学キャリアセンター・<sup>2</sup>北九州市立大学基盤教育センター・<sup>3</sup>北九州市立大学地域共生教育センター・<sup>4</sup>北九州市立大学地域戦略研究所)

近年、地域での体験型授業の充実による大学教育と社会との接続の強化や、大学と地方公共団体の協働による地域産業の活性化が求められている。しかし、地域活性化を目的とした教育活動は、学習環境の整備の難しさやカリキュラムにおける実施時期や期間の制約などにより、成果を出すことが非常に難しいことに異論はないだろう。そこで本研究では、福岡県中間市にて本学の学生が取り組み、地域活性化において一定の成果を上げた「なかまフットパス」を題材に、大学生および協働した地元住民や市役所職員合計 31 名に半構造化インタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、大学生が取り組んだからこそ生じた要因の抽出およびモデル化を行った。結果、専門知識と学生の主体性、行政のサポートによって獲得した「持続的に活動するための足場固め」を土台に、大学生独自の要因（「異質さ」「若さ」「未熟さ」）が相互に影響することで地元の魅力の「学び直し」を促し、ひいては「地元の自立へ」と発展していく「地方創生モデル」を提示することができた。

キーワード：地域活動、地域創生、フットパス、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)、大学生

## 1. 背景と目的

### 1.1. 背景と目的について

近年、社会において求められる人材が高度化・多様化する中、大学は学内だけに閉じた教育活動ではなく、農山漁村も含めた地域における体験型授業の充実を通じて社会との接続を意識した教育を強化すること（教育再生実行会議, 2013）や、大学と地方公共団体が協働し、地域産業の活性化を推進すること（まち・ひと・しごと創生本部, 2016）が求められている。しかし、地域活性化を目的とした教育活動は、その目標が曖昧であること、成果を出すには長期間必要であること、行政の強いサポートが必要であること、地元の主体性を引き出す必要があること、そしてその活動を地元で継承する必要があることなど、学習環境を整え、長期間実施し、成果を出すことが非常に難しいことに異論はないだろう。そこで本研究では、前述した5つの問題をクリアし、一定の成果を上げた「なかまフットパス」を題材に、大学生が取り組んだからこそ生じた要因を抽出することで、大学生が参加する他の地域活動でも成果を上げる可能性を持つ「地方創生モデル」の提示を試みることを目的とする。

### 1.2. フットパスについて

フットパスとはイギリス発祥の概念で、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く【Foot】ことができる小径（こみち）【Path】のことである（日本フットパス協会 web サイトより）。日本でも北海道、山形県、茨城県、熊本県などの市町村でフットパスが推進され、その多くが交流人口獲得に成果をあげており、特別な観光地がない“普通の”地域において施策を展開できる、持続可能で普遍的な地域活性化の一手法として注目されている（廣川, 2014; 内田, 2014）。

### 1.3. なかまフットパスについて

なかまフットパスとは、福岡県中間市と北九州市立大学が連携して取り組んだ、市の正式な観光政策の一事業である。2015年に遠賀川水源地ポンプ室が世界遺産に認定されたことを契機に、従来何も観光資源がないとされていた中間市に新しい観光モデルを創出したいという市の要望に応え、本学のフットパスの研究者と大学生が協働し、2014年4月よりスタートした。成果として、地元住民の理解を得、協力してフットパスのコースを3コース策定し、その一つはフットパスネットワーク九州（以下 FNQ と略す）によって正

式認定を得ている。本取組が正式なコース作りを行った以外に、一定の成果を上げたとする根拠が、地元住民の自立が明示化したことである。当初、中間市の依頼を受けた教員（著者の廣川・内田・見館）が、受託した予算と納期を優先し、職員と教員が起案して大学生が作業を行うスタイルで取り組みを進めていた。しかし、その途中でこのままでは地元主体にはならないと大学生が反発し、一旦納期をリセットして、地元主体となるように中間市の市政だよりを用いて地元住民からの協力者を募り、地元住民を主役にするように、腰を据えてじっくりと取り組むスタイルに舵を切った。結果、最初の3コースは学生と行政が主体となってコース作りを行ったが、4つ目のコースは地元住民と大学生が一緒にコース作りを行い、5つ目のコースは最初から地元住民が中心となってコース作りを行い、ついに6つ目のコースは地元自治会からコースを作りたいと要望が上がった。つまり、大学生に依存するのではなく、地元住民が自立的に動き出すまでになった。例えば時任ほか（2015）は、山形大学が9年間継続して過疎地域で展開しているサービス・ラーニングを取り上げ、学生を受け入れることによって地域にかつて存在した行事や住民間の交流が「一時的に」復活し、それらが住民の地域に対する持続願望に繋がっていることを明らかにしているが、「一時的に」では大学生の活動が地域活性化につながったとは言えない。比べてななまフットパスの取組みは、地元住民が大学生の手を借りず自ら地域活性化に取り組み出したという点において、地域活性化に向けて一定の成果を上げた事例と言えるだろう。

## 2. 研究方法

### 2.1. 研究対象

本学の学生が約2年間取り組み一定の成果を上げたななまフットパスを題材に、本活動の登場人物のほぼ全員をインタビュー対象者とした。具体的には、地元住民20名（フットパスのコース作りやコース途中の休憩場所や飲食物の提供などおもてなしに参加した自治会の皆様8名、フットパスのコース作りやガイドを担当した現地ガイド7名、フットパスコース上の農家、フットパスのおもてなしにご協力いただいた団体と地元神社の宮司）と、本取組をコーディネートした本学の学生全員（6名）、そして、中間市役所の職員全員（5名）、以上合計31名とした（表1）。

### 2.2. データの収集方法

インタビューは筆者1名（見館）が2015年9月24日から12月25日までの期間に行った。場所については、本学の学生は著者の研究室で、中間市役所の職員は市役所の現場で、地元住民は中間市役所の地域交流センターも

表1 インタビュー対象者内訳

セット	カテゴリ	年代	性別	人数
1	自治会	男性 60代、 女性 70代	男性 2名、 女性 1名	3
2	自治会	60代	男性	1
3	自治会	60代、70代、 80代	男性	3
4	自治会	70代	女性	1
5	ガイド	30代	女性	1
6	ガイド	60代	男性、女性	2
7	ガイド	70代	男性	2
8	ガイド	70代	男性、女性	2
9	農家	60代	男性	1
10	団体	70代	女性	3
11	宮司	70代	男性	1
地元住民計				20
12	大学生	3年生	女性	1
13	大学生	3年生	女性	1
14	大学生	3年生	男性	1
15	大学生	3年生	女性	1
16	大学生	3年生	女性	1
17	大学生	3年生	女性	1
学生計				6
18	職員	30代	女性	1
19	職員	40代	女性	1
20	職員	40代	男性	1
21	職員	40代	女性	1
22	職員	50代	男性	1
職員計				5
総合計				31

しくはそれぞれのご自宅やその地域の公民館で行った。方法は半構造化インタビューとし、質問内容は「大学生が参加したからこそ生じた、ななまフットパスの成功要因」について、約1時間自由に語って頂いた。なお、本学の学生および市役所職員については1名ずつのインタビューとしたが、地元住民の皆様については単独では話しにくいという声の一部あり、6ケースのみ複数名同時でインタビューを行った。22セットのインタビューを行った結果、6つの概念が抽出され、徐々に理論的飽和が確認された。なお、インタビューの報酬については、中間市役所の職員と地元住民には菓子折りを贈り、学生についてはアルバイト料を支給した。ICレコーダーで録音したデータのテキスト化（逐語

化)については、なかまフットパスに参加した学生が行った(謝金を支給)。理由は地元住民の皆様が地元の言葉を用いていること、また対話の中に出現する地名やイベントなどの専門用語を逐語化するには、なかまフットパスに参加した者でないと正しくできないと考えたからである。

2.3. 分析の方法

分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser & Strauss, 1967; 以下 M-GTA) を採用した。M-GTA は、データから概念を生成し、複数の概念間の関係を解釈的にまとめ、概念関係図として提示して質的データの解釈をする方法である (Glaser & Strauss, 1967; Glaser, 1978; Strauss, 1987; 木下, 2007)。本研究が対象とする現象がプロセス的性格を持っているため、社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に優れた理論である M-GTA が本研究の分析とふさわしいと考えた。

分析の手順としては、逐語化したデータを分析テーマ「大学生が参加したからこそ生じた、なかまフットパスの成功要因」に着目し、類似例を集めながら、分析ワークシート(後述)を用いてその意味の解釈の思考プロセスの記録(理論的メモ)や定義付けを行い、6つの概念を生成し、その概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討しつつ、本活動がスタートしてから地元住民の皆様が自立するまでに至る過程を、概念の関係図として作成した(後述)。

2.4. 概念生成の例示

表2は「概念2:若さ」の分析ワークシートの例である。

表2 分析ワークシートの例 (概念2:若さ)

概念2:若さ
<b>定義:</b> 若さがエネルギーとなり、意欲を引き出す。
<b>具体例:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>• えー。ほんと(学生と)しゃべりよったら時間忘れることある。やっぱし若い人とね、話す方がね、えー自分たちの娘はまだ40代ちゆっても親子の話とかだいたい限られとるからね。 【ガイド70代男性】</li> <li>• いろんなことを若いからわかってないんですけど、ゆえに口で教えてあげれば素直にそれをしていく、なかなか年取ったら素直になれないもんやけん、色々屁理屈ゆうたりなんかしてね。 【自治会70代女性】</li> <li>• (学生がいることで) やっぱガイドさんたちも、どんどん若々しくなっていき、なんかそういう意味では、地元の人がこう、若返るといっか、活性化に繋がっているのではないかと思います。 【職員30代女性】</li> </ul>
<b>理論的メモ:</b> 学生が地域に訪れると「パッと光が差す」(時任ほか, 2015)、若者との交流による健康への効果(山梨県立大学地域研究交流センター, 2012; 北村, 2003)

このように M-GTA では、インタビューごとに分析ワークシートを用いて概念を生成し、次のインタビューではオープンクエッションで新しい概念が生成されることを期待しながら、それ以前に生成された概念についても問うことで、その概念が多くの対象者に共通するものかどうか、逆に固有なものなのかを確認し、もし後者であればその概念を捨てる作業も行う。同時に定義づけの修正をしながら、似たような概念であれば統合を行う。なお、結果、生成された概念同士の関係を示しながら時間軸に並べたものを概念の関係図と呼ぶ。

3. 結果と考察

分析の結果、本活動の基盤となる1つの概念と、特に大学生が参加するからこそ生じた3つの概念、そしてその3つの概念が生み出した2つの概念の、計6つの概念が抽出され、その概念の関係図(図1)を作成できた。

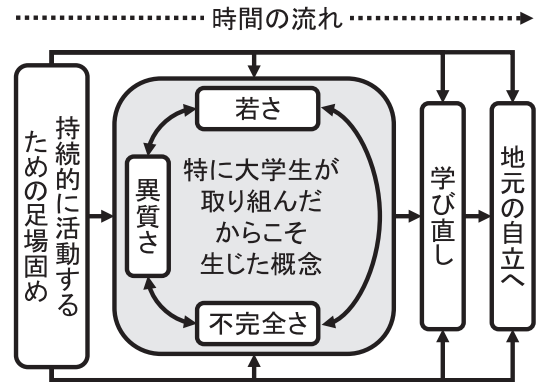


図1 大学生が参加するからこそ生じた6つの概念の関係図

3.1. 概念1【持続的に活動するための足場固め】

【持続的に活動するための足場固め】とは、本取組を持続的活動するために必要となる、専門知識と学生の主体性、行政の支援を意味する。

まず、専門知識とは、学生全員がフットパスの理念や正式認定基準や手続き、そして中間市の現状について、FNQが提供する「フットパス大学」に自費で受講・修了し、日本全国に点在する他の地域のフットパスに自費で参加し、そして職員の皆様から中間市についてのレクチャーを受けることで十分に獲得したことである。Mooreほか(1996)は、プロジェクト型学習には事前学習が重要だと指摘している。具体的には、学園祭での出店計画を設計する課題について、Aチーム(統制群)はすぐに活動し始め、Bチーム(実験群)は活動する直前の3時間、問題が起きた時にどう行動するかプランを立てる活動を実践したところ、Bチームのプランの方が品質は高いことを明らかにしている。フットパスや当該地域について地元住民に自信を持って説

明するために、専門知識を事前学習することは必要不可欠なのだ。以下はその概念を指す発話の一例である。なお、発話の中のカッコは読者が文脈を理解しやすいように著者が書き足したものである（以降同じ）。

なんかその私とそのフットパスをしていてすごく大事だ  
なていうか学んだ大きな1つのこととしては、なんか学生  
だからとか、まだ自分大学1年生なんでとか、中間のこ  
と全然知らないんで意見とか言えないですみたいなスタ  
ンスは絶対にダメだなってわかって。【大学生・女性・3年生】

次に、学生の主体性とは、教員が「やらせる」のではなく、学生の主体性を信じて、任せることである。PolmanとPea(1997)やThomas(2000)は、プロジェクト型学習には「埋め込まれたコーチング」が重要だと指摘している。具体的には、プロジェクトに参加する学生は教員がいつもそばにいるわけではなく、言わばガイド無しで探索するように実践されるため、当然うまくいかないことが起こる。その時教員は指示をするのではなく、コーチング、つまり学生の話をよく聴き、感じたことを伝え、質問することで学生の自発的な行動を促すこと、学生は自らの意志で進むべき道についての決定を行うと指摘している。もちろん、場合によって教員が指導せざるを得ない場面もあるだろう。しかしその時も教員は学生の動きを解釈し直し、教員と学生と一緒にその行動の意味を議論し、解決に繋がる行動を提案するなど、単なる指示にならないように配慮することが重要だと指摘している。約2年間もの長期間、大学生の主体性が無く、教員の指示だけで毎週歩き続けることは、ほぼ不可能であろう。以下はその概念を指す発話の一例である。

「やらされてないんですか？」っていうのはよく聞かれますね(笑) いろんなところでたぶんやってるんですよ、授業としてフットパスを。大学がゼミとしてやってたりもすると思うんですよ。(単位目的で来ている学生は) そっちは結構、強制的な部分があるんですよ。そういう感じを見て、「この前見た時はそういう学生さんがいらっしたんですけど、実際のところはどうなんですか？」みたいな「やらされたりとかしてないのー？」みたいな感じで聞かれたりとか。「これ強制やし適当にやっとならいいよー」みたいな感じで、そういう感じの人たちも学生だったら結構いるんですよ。その場のぎでまあなんとでもなるじゃないですか。でも(私は) そういうので行ってないし。なんかそういうのが広まっちゃうと困りますよね、逆に。

【大学生・女性・3年生】

最後に、行政の支援とは、中間市役所の全面的協力を得ていることである。具体的には広報や問い合わせ窓口、自治会への橋渡しなどのサポートを指す。学生だけのプロジェクトでは、中間市市民に本取組を認知させることは難しく、またその地域におけるキーパーソンを知り、そしてそのキーパーソンに出会うことは難しい。中間市役所の公的なサポートがあることで、本プロジェクトが持続的に活動できたと言えるだろう。以下はその概念を指す発話の一例である。

学生さんたちだけで、まちづくり、街の賑わいをしたいと言っても、そんなのあんた、役所も入れないとダメやないかと、役所がせな意味がなからうかと、役所がする仕事だろうかとという風に、地域の人は思うんですよ。そこで役所と学生がおることで、ああ、学生達がやろうとしていることを、ちゃんと最後は行政が責任持ってやってくれるんだらうかと、多分一方だけでは絶対ダメだと。

【職員・男性・40代】

### 3.2. 概念2【異質さ】

【異質さ】とは、大学生の活動自体が広報活動になること、大学生参加の官学連携事業は承認を得やすいこと、大学生すなわち「よそ者」だからこそその気づきを意味する。

まず、大学生の活動自体が広報活動になることとは、中間市には大学が無く、普段いないはずの大学生が、頻繁に農村や住宅街を歩き、積極的に地元住民に声を掛けること自体が大変珍しいことであり、大いに地元住民の気づきを与えたことを指す。実際、市役所には「あの大学生たちは何だ」という市民からの問い合わせ多数あり、その都度職員の皆様がフットパスについて丁寧に説明したことが、地元住民に対するフットパス普及を後押ししたと考えられる。以下はその概念を指す発話の一例である。

そりゃそうでしょ、歩かない大学生がいっぱい歩いてるんで、何があったのって感じで、ちょっとフットパスって言葉も浸透していないですし、やっぱりこう、何してんのっていう感じの、やっぱり不安気な人も、中にはいらっしたりしたんで、こうやってこうやってしてるんだっていう説明は、何回か話に行ったりとか、したりはしましたけどね。

【職員・女性・40代】

次に、大学生参加の官学連携事業は承認を得やすいこととは、職員のみが発案ではなく、大学教員が参加すること、そして何より、普段地元を歩くことがない大学生自身が歩きたくなるコースを地元住民と共に創るという官学連携事

業は、庁内および議員に対して承認を得やすいということである。以下はその概念を指す発話の一例である。

産学が協働しなさいというのは、国の方針やないですか。(議員の) みんなそれはわかっているわけですよ。わかっているんだけど、じゃあ、どうやって、何をどうやってということになると、わかんないですよ。で、我々みたいな、(大学教員と大学生と連携して) こうやりますよって言いますと、ああそうかって話になるでしょ。(議会に) 通りやすいんですよ。【職員・男性・50代】

最後に、大学生すなわち「よそ者」だからこそその気づきとは、地元の景色や食材に対する驚き、つまりよそ者・第三者である大学生だからこそ、地元の良さにあらためて気づくことである。敷田(2005)は、地域にいながらよそ者と同じような視点も持てる存在を「地域内よそ者」と呼び、彼らこそ、何らかの学習経験や経験を通して、地域が持つしがらみや常識を乗り越えていき、地域変容を生み出す可能性があると指摘している。以下はその概念を指す発話の一例である。

その、若い発想とか、よく言うのが、最初のうちは、若い、新採のどこの会社でも、やる気に燃えてきているんですけど、だんだんしがらみを覚えて、もうあえてもうこれはダメだなと固定観念が生まれて、もうこれはできないと、できる・できないを勝手に決めていくことがあるんですけど、それを思い出させてくれると、ああ、ああいう頃もあったなと、確かに純粋に、これがなぜできないのかっていう、素朴な疑問、純粋な疑問を投げかけてきてくれることも多いし、あの、やっぱり柔軟な発想、特に私たちが役所でやっていけないといけないことは、高齢者の生活や福祉を守らなくてはいけないっていうのもあるけど、若い人が住みよい街にしないといけない、若い人が何を求め、何を考えているのかを訊く機会は、訊かないと分かんない。そこに、学生さんたちが、中間に来てもらって、感じたことを聞くっていうのは、こんなことをしたらどうですかっていう提案は、役所もそうですし、地域もそうですし、他の会社もそうだと思いますけど、青いなって思うところもあるけれど、決してあの、そりやもう端からダメだよっていうものでもない。

【職員・男性・40代】

### 3.3. 概念3【若さ】

【若さ】とは、若者との交流こそがエネルギーであることと、若者が地域にいるだけで地域が華やぐことを意味する。

まず、若者との交流こそがエネルギーであることは、若者と普段話すことがほとんどない高齢者にとって、大学生と対話すること自体が新鮮で楽しく、若返りということである。山梨県立大学地域研究交流センター(2012)は、看護学生による高齢者施設での交流事業の前後の生きがい感を比較したところ、「私は今の生活に満足感がある」「私の毎日は充実している」の2項目で有意な差がみられたとしている。同様に北村(2003)も幼老複合施設(老人ホーム&幼稚園)での異世代交流の結果、自然で日常的な交流を目指して積極的な取り組みを行っている施設では、施設内での高齢者と子どもの交流が、利用者本人の精神面や身体面にさまざまな好影響を与えていること、さらに調査事例の中には、施設を通じて培われた関係が利用者から家族や地域住民へ、施設内から施設外へと広がっているケースや、子どもが成長して施設を離れた後も続いているケースなどがみられたとしている。いずれにしても高齢者と若者との交流には、精神的にも身体的にもプラスの効果があることがわかる。以下はその概念を指す発話の一例である。

ほて、歩きながらおいちゃんおばちゃんにこんにちとはか、おはようございますとか、なんか言われた方も嬉しそうですよ、学生さんから声かけられると。あのエネルギーはいいですよ(笑)。あれはエネルギーがいいですね。元気になりますね、なんゆっても面白いし、そして、話も面白いですよ。(面白いですか?うちの学生) いやちょっとポイントの外れた答えもありますけど、それがまた、面白いんですよ。【ガイド・男性・60代】

次に、若者が地域にいただけで地域が華やぐこととは、地域のコミュニティに大学生がいること自体で、地域に彩りを与え活気づくことを望んでいることである。時任ほか(2015)は、学生が地域を訪れると、「パッと光が差す」「地域が明るくなる」という言葉が生まれたと表現している。これは、人口減少・少子高齢化や住民間の交流の衰退といった課題が生活に大きな影を与えている過疎地域の日常生活において、学生を受け入れることは「晴れ間」を一時もたらしていることを意味していると考えられる。以下はその概念を指す発話の一例である。

うちなんか90の老人が二人いますけど、死ぬ話と墓場の話、食事中も。もうやめてよねって感じ(笑)。そんな話ばかりですよ。今日は一日元気で良かった、明日はどうなるかわからんとか、誰々が死んだ、病院に入った、転けた、毎日ですもん。そうですね、そういう話題しか出

んとですよ、歳とったら。とにかくあの、60 になってそこそこはですね、年金の話がよく出る、でそれから 70 に近くになったらそれこそ、病気の話や（お墓?）そうお墓の話、死後の話、財産の話、そういう話しかないんですよ。だから若い人と話したら元気をもらえるんですよ。

【ガイド・女性・60代】

### 3.4. 概念 4 【未熟さ】

【未熟さ】とは、大学生だからこそ、不信感が無いことと、何かを教えてあげたいと思うことを意味する。

まず、大学生だからこそ不信感が無いこととは、大学生だからこそ街を歩いていても大人に比べ不信感が無いことである。逆に教員や職員が団体で歩いていたらおそらく警戒されるだろう。以下はその概念を指す発話の一例である。

市役所だけで自治会とかに行くと、市役所って目で見られますね。市役所の人々が来たって。私たちの税金使って今度は何するんだってというような雰囲気になると思うんですけど、学生さんが入っていると、顔がほころんで、まあ、おじさんだったら、女子大生見れば、なんかこう、嬉しくなるし、おばちゃんたちが、（男子学生の名前）くんとかと接すれば、こんな若い子が言うのなら、やってみようかなっていう、ちょっと、何ていうかな、潤滑油っていうか、居てくれることで私たちも話しやすくなるってのは、かねがねみんなが言っていました。大人同士よりも、ちょっと若い、子供?子供じゃないけど学生さんがいた方が、話が進みやすいし、ちょっと無理なことでもまあ、あんたたちが言うならやっちゃろうかっていう感じに、なってくれるような雰囲気があります。

【職員・女性・30代】

次に、大学生だからこそ、何かを教えてあげたいと思うこととは、大学生ならではの純粋な「中間市を盛り上げたい」という学習姿勢が、「もっと教えてあげよう」「失敗してもいいからやってみよう」という気持ちを引き出したことである。高山（2004）は、青少年との交流経験は、高齢者にとって青少年に対する役割の自覚や有能感を高めると指摘している。同様に、時任ほか（2015）は、地域住民の指導が無いことによって学生がうまく積極的になれず、結果として地域住民の持続願望を満たすような活動に至らないこともあり得るため、サービス・ラーニングを展開する際には、サービスの提供側と収受側の関係を飛び越え、大学側と地域側双方が教育的意識を持って指導していく必要があるとし、さらに実際、住民が学生に対して教育的意識を持って接していることを指摘している。以下はその概念を指す発話の

一例である。

僕たち自身の立場なんですけど、不完全というか、半人前という概念があるらしくて、そういう不完全さとか、完璧じゃないって人たちが入ることによって、それを補完してくれる、お互い補い合う関係性が、地域づくりには必要なかなって。

【大学生・男性・3年生】

### 3.5. 概念 5 【学び直し】

【学び直し】とは、地元の学習意欲や自立意識の惹起を意味する。具体的には、大学生の素直な発話で気づかされた地元の魅力を活かし、地域活性化について地元としてやるべきことを考え始めること、大学生にもっと地元の魅力を伝えるために、自ら積極的に地元を学ぼうとすること、大学生はいつまでもいないのだから、地元主体でやらないといけないことに気付くことである。以下はそれぞれの学び直しの例である。

あ、あたしは、あの学生さんにフットパスついてきてもらって、いろいろ知ったことで、自分のまちをなんか自慢したくなって（笑）。それで知れば知るほど、自慢したくなって、今まで中間っていったらヤクザとかいろいろなことでも落ち込んでいたので、今最近はその、世界遺産できましたし、フットパスでいろいろコースがあって、開拓していただいたことで、なんか偉い人に自慢をするような感じになってますね。（中間も捨てたもんじゃないと）はい、捨てたもんじゃないのよ。こんなものがあるのよ知ってる?こんなものがあるのよ知ってる?ってけこう言うようになりました。

【ガイド・女性・60代】

相手が大学生なので、自分も大人にならなくてはいけないというのがあるし、地元のことを知らないというのもこの子たちに対して恥ずかしいという、思いもあったり。どうしてもやっぱりこう、今で言うガイドさんたちとかも、学生さんと、例えば新しく入ってきた職員の私を見ると、いつも学生さんの方に、若いのに頑張ろうね、とか、そういうふうになるのが普通なので。そうならないためにもっとこう、知識を付けなくちゃって、親しくならないとっていうのがありました。

【職員・女性・30代】

なんか個人的にはその主役地域の人が主役として思い始めるってというのがその、主役なんだぞって認識して自分たちでやっていくぞってところがゴールだと思っていて、なんかそのあくまでサポートなんで。で、なんか地

域の人がそのなんて言うんだろうなんかやろうって自分たちからなんかこういうのもやりたいとかこういうのも自分たちが本来はやらなきゃいけないんじゃないかなっていうその今学生がやってる部分を自分たちが本来はやらなきゃいけない部分があるんじゃないかっていう認識を持ち始めたっていうのはすごくなんか良いことやなって自分としては、はっ!てなったんですけど。 【大学生・女性・3年生】

### 3.6. 概念6【地元の自立】

【地元の自立へ】とは、本取組を活用し、地域活性化について具体的にできることを考えることである。以下ではフットパスと立ち飲み（北九州では角打ちと呼ぶ）や地元のお祭り、民泊の連携についてのアイデアが展開されている。

私ちょっと学生さんのアイデアとかいいたきたいことがあって、で、それで学生の方となんか一緒にやれば良いなと。ほら、昭和のレトロのそれこそ夜のあの開放なんかもちょっと。ツアーをね、昭和町の。あの、ちょっと一杯飲みながらやっていくのもいいかなと。だからその、北九州市や黒崎なんかでちょっとやってますよね、だからあのあれのちょっとミニ版でもいいから、やってみようたら、参加する人は行くん違うかなと。 【ガイド・女性・60代】

フットパスでお祭りをハシゴするとかは無いですか？（それは無いですけど、面白いですね）この間、月瀬八幡に行かれたでしょ？あそこで今度10月の土曜日の夜。あそこのおまつりなんです。何人か学生さんに言ってみたらどうですか？ただ歩いて地域をめぐらだけじゃなくて、地域の人と交流する所までを。 【自治会・女性・70代】

（福岡県の民泊支援について）あれもいいですよ、あれはちょっと違うけどね、あれはあれでいいですよ。空き家使ってもいいですけど、自分の家でもいいわけですけどね。あれは違う意味でいいと思いますけどね。（伊万里の民泊について）それいいなあ、それからスタートしようかね、それこそ民泊でしたら、豪華な食事出さなくていいですもんね。来年のフットパス大会の時に、民泊と一緒にすればいいかもしれないですね。

【職員・男性・50代】

## 4. まとめと今後の課題

以上のように、結果、専門知識と学生の主体性、行政のサポートによって獲得した【持続的に活動するための足

場固め】を土台に、大学生独自の要因（【異質さ】【若さ】【未熟さ】）が相互に影響することで地元の魅力の【学び直し】を促し、ひいては【地元の自立へ】と発展していく「地方創生モデル」を提示することができた。

敷田（2005）は、よそ者が地域にとってどのような「利益」をもたらすのかを先行研究をレビューして以下の5つにまとめている。

- ① **技術や技能などの知識の地域への移入**  
よそ者だからこそ、地域にない知識や技能を持ち込める。
- ② **地域の持つ創造性の惹起や励起**  
単なる持ち込んだ知識の活用ではなく、その知識によって地域の人々が刺激を受ける効果。
- ③ **地域の持つ知識の表出支援**  
よそ者による、地域住民が本来持っている知識（ローカル・レッジ）を表出する支援となる。
- ④ **しがらみのない立場からの問題解決の提案**  
よそ者だからこそ、「地域とのしがらみのない立場」からの解決案の提案ができる。
- ⑤ **地域（や組織）の変容の促進**  
よそ者の持つ異質性は地域側に「気づき」をもたらし、そこから地域自体が変容する。

本研究で明らかになった「地域創生モデル」と照らし合わせてみると、①は【持続的に活動するための足場固め】によって生起し、②③④は【異質さ】【若さ】【未熟さ】によって引き出され、⑤は【学び直し】を経た【地元の自立へ】によって到達する点が、本モデルと通底していることが分かる。特に大学生が取り組んだからこそ生じた3つの概念（異質さ・若さ・未熟さ）を明示したことが本稿の成果であろう。言い換えれば、今後大学生が参加する地域活性化を目指した学習環境を設計する際には、まず、大学生が持続的に活動するための足場固めをした上で、大学生ならではの特性（異質さ・若さ・未熟さ）を活用することで、地元住民と教員がともに学生を育てる意識を涵養し、地元の魅力を学び直し、そして地元の自立へとコーディネートすることが重要である可能性が考えられるだろう。

最後に、今後の課題としては、今回提示できた「地域創生モデル」が、フットパス以外の地域活動にも汎用的に活用できるのかを確認する必要がある。また、参加する大学生の知識や能力に応じた事前学習についても検討することが必要だと考える。本研究をさらに深めていきたい。

## 謝辞

中間市役所の職員および地元住民の皆様には、本取組に対する多大なるご支援を頂き、誠に感謝しております。またフットパス研究所の井澤り子氏および濱田孝正氏には、フットパスについて多大なるご指導を頂き、誠に感謝しております。ありがとうございました。

## 引用文献

- Glaser, B., & Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New Brunswick and London. Aldine Publishing Company.
- Glaser, B. (1978). *Theoretical Sensitivity: Advances in the Methodology of Grounded Theory*. Mill Valley. The Sociology Press.
- 廣川 祐司 (2014). 「地域活性化のツールとしてのフットパス観光—公共性を有した地域空間のオープンアクセス化を目指して—」『地域課題研究』2013年度, 59-75.
- 木下 康仁 (2007). 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.
- 北村 安樹子 (2003). 「幼老複合施設における異世代交流の取り組み—福祉社会における幼老共生ケアの可能性」『ライフデザインレポート』153, 4-15.
- 教育再生実行会議 (2013). 『これからの大学教育等の在り方について (第三次提言)』 ([http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/pdf/dai3\\_1.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/pdf/dai3_1.pdf)) (2016年8月15日)
- まち・ひと・しごと創生本部 (2016). 『まち・ひと・しごと創生基本方針 2016』 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/h28-06-02-kihonhousin2016hontai.pdf>) (2016年8月15日)
- Moore, A., Sherwood, R., Bateman, H., Bransford, J., & Goldman, S. (1986). *Using problem-based learning to prepare for project-based learning*. Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association: New York.
- 日本フットパス協会 (2014). 『フットパスとは』 (<http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html>) (2016年8月15日)
- Polman, J., & Pea, R. D. (1997). *Transformative communication in project science learning discourse*. Chicago: Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association.
- 敷田 麻実 (2005). 「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江湾の久爾』50, 74-85.
- Strauss, Anselm L. (1987). *Qualitative Analysis for Social Scientists*. Cambridge University Press.
- 高山 緑 (2004). 「青少年と高齢者の世代間交流プログラムに関する一考察」『武蔵工業大学環境情報学部紀要』5, 121-130.
- Thomas, John W. (2000) 『A review of research on project-based learning, Buck Institute for Education』 ([http://bie.org/object/document/a\\_review\\_of\\_research\\_on\\_project\\_based\\_learning](http://bie.org/object/document/a_review_of_research_on_project_based_learning))
- 時任 隼平・橋爪 孝夫・小田 隆治・杉原 真晃 (2015). 「過疎地域におけるサービス・ラーニング受け入れに関する研究」『日本教育工学会論文誌』39(2), 83-95.
- 内田 晃 (2014). 「地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題」『地域課題研究』2013年度, 39-58.
- 山梨県立大学地域研究交流センター (2012). 「若者との交流による地域高齢者の自己の役割認識と社会貢献意識の活性化に関する研究」『2011年度研究報告書』.



# Development of a Regional Revitalization Model for University Students through the Transformation of Local Communities: Case Studies of Regional Revitalization Based on the Introduction of Footpaths in Regional Cities

Yoshitaka Mitate<sup>1</sup>, Yuji Hirokawa<sup>2</sup>, Fumitoshi Murae<sup>3</sup>, Akira Uchita<sup>4</sup>

<sup>1</sup>Career Center, The University of Kitakyushu, <sup>2</sup>Center for Fundamental Education, The University of Kitakyushu,

<sup>3</sup>Regional Symbiosis Education Center, The University of Kitakyushu, <sup>4</sup>Institute for Regional Strategy, The University of Kitakyushu)

In this study, the authors conducted a series of semi-structured interviews with 31 university students, as well as with local residents and city employees, on the topic of regional revitalization in Nakama City, Fukuoka Prefecture. The results of the interviews with local residents and city employees were consistent with the responses of university students. The factors attributed to university students were identified in order to create a regional revitalization model. This model encourages reeducation in local communities and promotes self-sufficiency at the local level by exploring a number of mutually interdependent factors characteristic of university students (namely heterogeneity, youth, and inexperience). The model is based on harnessing specialized knowledge, encouraging students' independence, and building a platform for sustainable activity, achieved through government support.

Keywords: Regional activity, Regional revitalization, Footpath, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA), University student